

## 怪談女の輪

泉鏡花作

### 全一章

枕まくらに就ついたのは黄昏たそがれの頃ころ、之これを逢魔あふまが時とき、雀色時すずめいろときなど、いふ一日いちにちの内人間うちにんげんの影法師かげぼふしが一番ばんぼんやりとする時ときで、五時じから六時じの間あひだに起おこつたこと、私わたしが十七あきの秋あきのはじめ。

部屋へやは四疊でふし敷敷けた。薄暗うすくらい縦たてに長い一室しつ、兩方りやうほうが襖ふすまで何室どしちも他の座敷ほかざしきへ出入でいりが出来できる。詰り奥つまおくの方ほうから一方いほうの襖ふすまを開あけて、一方いほうの襖ふすまから玄關げんくわんへ通抜とほりぬけられるのであつた。

一方いほうは明窓あかりまどの障子しやうじがはまつて、其外そのそとは疊たみ二疊でふばかりの、しづくひ叩たたきの池いけで、金魚きんぎょも緋鯉ひしこも居ゐるのではない。建物たてもので取廻とりまはした此この一棟ひとむねの其池そのいけのある上うへばかり大屋根おほやねが長方形ちやうほうけいに切開きりひらいてあるから雨水あまみづが溜たまつて居ゐる。雨落あまおちに敷詰しきつめた礫こいしには苔こけが生はえて、虫蜒なめくぢが這はふ、濕しけてじと／＼する、内うちの細君さいくんが元結もとゆひをこゝに棄すてると、三七二十一日にちにして化くわして足卷あしまきと名なづ

ける蟻螂の腹の寄生蟲となるといつて塾生は罵つた。池を囲んだ三方の羽目は板が外れて壁があらはれて居た。室数は總體十七もあつて、庭で取廻した大家だけれども、何百年の古邸、些も手が入らないから、鼠だらけ、埃だらけ、草だらけ。

塾生と家族とが住んで使つてゐるのは三室か四室に過ぎない。玄關を入ると十五六疊の板敷、其へ卓子椅子を備へて道場といつた格の、英漢數學の教場になつて居る。外の蜘蛛の巢の奥には何が住んでるか、内の者にも分りはせなんだ。

其日から數へて丁度一週間前の夜、夜學は無かつた頃で、晝間の通學生は歸つて了ひ、夕飯が濟んで、私の部屋の卓子の上で、燈下に美少年録を讀んで居た。

一體塾では小説が嚴禁なので、うつかり教師に見着かると大目玉を喰ふのみならず、此以前も三馬の浮世風呂を一冊没収されて四週間置放しにされたゝめ、貸本屋から嚴談に逢つて、大金を取られ、目を

白くしたことがある。

其夜は教師も用達に出掛けて留守であつたから、  
良落着いて読みはじめた。やがて、

二足つかみの供振を、見返るお夏は手を上げて、  
憚様やとばかりに、夕暮近き野路の雨、

思ふ男と相合傘の人目稀なる横二、濡れぬ前  
こそ今はしも、

と前後も辨へず読んで居ると、私の卓子を横に附  
着けてある件の明取の障子へ、ばら／＼と音がした。

忍んで小説を読む内は、木にも萱にも心を置いた  
ので、吃驚して、振返ると、又ばら／＼ばらばらと  
いった。

雨か不知、時しも秋のはじめなり、洋燈に油をさ  
す折に覗いた夕暮の空の模様では、今夜は眞晝の様  
な月夜でなければならぬがと思ふ内も猶其音は絶  
えず聞える。おや／＼裏庭の榎の大木の彼の葉が散  
込むにしては風もないがと、然う思ふと、はじめは  
臆病で障子を開けなかつたのが、今は薄氣味悪くな

つて手を拱こまめいて、思おもはず暗くらい天井てんじやうを仰あふいで耳みみを澄すました。

一分ぶん、二分ぶん、間あひだを措おいては聞きこえる霰あられのやうな音おとは次第しだいに烈はげしくなつて、池いけに落おちこ込む小こしぶき■の形勢けはひも交まじつて、一時じは呼い吸きもつかれず、ものも言いはれなかつた。だが、しばらくして少すこし静しづまると、再ふたゝびなまけた連れん續ぞくした調子てうしではら／＼。

家いへの内うちは不のこらず残ざん、寂しんとして居ゐたが、この音おとを知らなしいではなく、いづれも聲こゑを飲のんで脈みやくを數かぞへて居ゐたららしい。

窓まどと筋斜すぢかひに上うへ下した差向さしむかつて居ゐる二階かいから、一どとうきやう度ど東とう京きやうに來きて博はく文ぶん館くわんの店みせで働はたらいて居ゐたことのある、山田やまだななにがしといふ名代なだいの臆病おくびやうものが、あてもなく、おい／＼と沈しづんだ聲こゑでいつた。

同時どうじに一室いつしつ措おいた奥おくの居へ室やから震ふるへ聲こゑで、何なんでせうね。更さらに、一寸ちよつと何なんでせうね。止やむことを得えず、えゝ、何なんですか、音おとがしますが、と、之これをキツカケに思おもひ切きつて障子しやうじを開あけた。池いけはひつくりかへつて

も居らず、羽目板も落ちず、壁の破も平時のまゝで、  
月は形は見えないが光は眞白にさして居る。とばかりで、何事も無く、手早く又障子を閉めた。音はかはらず聞えて留まぬ。

處へ、細君はしどけない寝衣のまゝ、寝かしつけて居たらしい、乳呑兒を眞白な乳のあたりへしつかりと抱いて色を蒼うして出て見えたが、ぴつたり私の椅子の下に坐つて、石のやうに堅くなつて目を閉つて居る。

おい山田下りて来い、と二階を大聲で呼ぶと、ワツといひさま、けたゝましく、石垣が崩れるやうにがたびしと駈け下りて、私の部屋へ一所になつた。

いづれも一言もなし。

此上何事が起つたら、三人とも團子に化つてしまつたらう。

何だか此池を仕切つた屋根のあたりで頻に礫を打つやうな音がしたが、ぐる／＼渦を巻いちやあ屋根の上を何十ともない礫がひよい／＼駈けて歩行く様

だつた。をかしいから、俺は門の處に立つて氣を取られて居たが、變だなあ、うむ、外は良い月夜で、蟲の這ふのが見えるやうだぜ、恐しく寒いぢやあな  
いか、と折から歸つて來た教師はいつたのである。

幸ひ美少年録も見着からず、教師は細君を連れて別室に去り、音も其ツ切聞えずに濟んだ。

夜が明けると、多勢の通學生をつかまへて、山田が其吹聴といつたらない。鶴が來て池で行水を使つたほどに、事大袈裟に立到る。

其奴引捕へて呉れようと、海陸軍を志願で、クライブ傳、三角術などを講じて居る連中が、鐵骨の扇、短刀などを持參で夜更まで詰懸る、近所の仕出屋から自辨で兵糧を取寄せる、百目蝋燭を買入れるといふ騒動。

四五日経つた、が豪傑連何の仕出したこともなく、無事にあそんで静まつて了つた。

扱其黄昏には、少し風の心持、私は熱が出て惡寒が

したから搔卷にくるまつて、轉寢の内も心が置かれ  
る小説の搜索をされまいため、貸本を藏してある件  
の押入に附着いて寝た。眠くはないので、ばちくり  
／＼目をニいて居ても、物は幻に見える様になつて、  
天井も壁も卓子の脚も段消えて行く心細さ。

塾の山田は、湯に行つて、教場にも二階にも誰も  
居らず、物音もしなかつた。枕頭へ ばた／＼  
といふ蹠音、ものゝ近寄る氣勢がする。

枕をかへして、頭を上げた、が誰も來たのではな  
かつた。

しばらくすると、再び、しと／＼しと／＼と摺足  
の軽い、譬へば身體の無いものが、踵ばかり疊を踏  
んで來るかと思ひ取られた。また顔を上げると何に  
も居らない。其時は前より天窓が重かつた、顔を上  
げるが物憂かつた。

繰返して三度、また蹠音がしたが、其時は枕が上  
らなかつた。室内の空氣は唯彌が上に蔽重つて、お  
のづと重量が出來て壓へつけるやうな！

鼻も口も切さに堪へられず、手をもがいて空を拂ひながら呼吸も絶え／＼に身を起した、足が立つと、思はずよるめいて向うの襖へぶつかつたのである。

其まゝ押開けると、襖は開いたが何となくたてつけに粘氣があるやうに思つた。此處では風が涼しからうと、其を頼に恚うして次の室へ出たのだが矢張り蒸暑い、押覆さつたやうで呼吸苦しい。

最う一ツ向うの廣室へ行かうと、あへぎ／＼六疊敷を縦に切つて行くのだが、瞬く内に凡そ五百里も歩行いたやうに感じて、疲労して堪へられぬ。取纏るものはないのだから、部屋の中央に胸を抱いて、立ちながら物と呼吸をついた。

まあ、彼の恐しい所から何の位離れたらうと思つて怖々と振り返ると、ものゝ五尺とは隔たらぬ私の居室の敷居を跨いで明々地に薄紅のぼやけた絹に搦まつて蒼白い女の脚ばかりが歩行いて來た。思はず駈け出した私の身體は疊の上をぐる／＼まはつたと思つた。其のも一ツの廣室を夢中で突切つたが、暗が

りで三尺の壁の處へ突當つて行處はない、此處で恐  
しいものに捕へられるのかと思つて、あはれ神にも  
佛にも聞えよと、其壁を打破らうとして拳で敲くと、  
ぐら／＼として開きさうであつた。力を籠て、向う  
へ押して見たが効がないので、手許へ引くと、颯と  
開いた。

目を塞いで飛込まうとしたけれども、あかるかつ  
たから驚いて退つた。

唯見ると、床の間も何にもない。心持十疊ばかり  
もあらうと思はれる一室にぐるりと輪になつて、凡  
そ二十人餘女が居た。私は目まひがした故か一人も  
顔は見なかつた。又顔のある者とも思はなかつた。  
白い乳を出して居るのは胸の處ばかり、背向のは帯  
の結目許り、疊に手をついて居るのもあつたし、立  
膝をして居るのもあつたと思ふのを見るのと瞬くう  
ち、ずらりと居竝んだのが一齊に私を見た、と胸に  
應へた、爾時、物凄しい聲音を揃へて、わあといつた、  
わあといつて笑ひつけた何とも頼ない、譬へやうの  
ない聲が、天窓から私を引抱へたやうに思つた。ト

タンに、背後から私の身體を横切つたのは例のもの  
で、其女の脚が前へ廻つて、眼さきに見えた。呵呀  
といふ間に内へ引摺込まれさうになつたので、はッ  
とする前へ倒れた。熱のある身體はもんどりを打  
つて、元のまゝ寢床の上にドツと跳るのが身を空に  
擲つやうで、心着くと地震かと思つたが、冷い汗は  
瀧のやうに流れて、やがて枕について綿のやうにな  
つて我に返つた。奥では頻に嬰兒の泣聲がした。  
其から煩ひついて、何時まで経つても治らなかつ  
たから、何もいはないで其の内をさがつた。直ちに  
忘れるやうに快復したのである。

地方でも其界限は、封建の頃極めて風の悪い土町  
で、妙齡の婦人の此處へ連込まれたもの、また通懸  
つたもの、況して腰元妾奉公になど行つたものゝ生  
きて歸つた例はない、とあとで聞いた。殊に件の邸  
に就いては、種々の話があるが、却つて拵事じみる  
からいふまい。

教師は其あとで、嬰兒が夜泣をして堪へられない  
といふことで直に餘所へ越した。幾度も住人が變つ

て、  
今<sup>こん</sup>度<sup>ど</sup>のは久<sup>ひさ</sup>しく住<sup>す</sup>んで居<sup>ゐ</sup>るさうである。

【完】